

ペア・ノアゴーPer Nørgård (1932-) の打楽器独奏作品における作曲語法の研究  
A Study of the Compositional Grammar in Per Nørgård's (1932-) Solo Percussion Works

山口 啓 YAMAGUCHI Akira

本論文は、デンマークの現代音楽作曲家ペア・ノアゴーPer Nørgård (b.1932) の打楽器独奏作品を分析し、その作曲語法の特徴及びその変遷を明らかにすることを主意としている。ノアゴーは独自に開発した「無限音列」という作曲技法を用いることで有名であり、それを通じて個性的な複雑さや難解さを生み出している。打楽器作品においては、「無限音列」をリズムに特化させた「無限リズム」と、音の強弱やリズムの推移の技法である「ウェーブ技法」を駆使している。筆者は修士課題研究において、ノアゴーの打楽器独奏作品の中でもっとも有名な《I Ching》の分析を行った。その結果、「無限リズム」や「ウェーブ技法」を巧妙に用いることで、打楽器の特性を引き出していること、また、楽器配置や記譜法、そして何より打楽器を用いた音楽の作りこみにおいて、ノアゴー独自の緻密さがあることがわかった。そして、そのことからそうしたノアゴーによる緻密な作りこみが他の作曲家にはない複雑さや難解さを生み出しているのではないかと考察した。

この研究の過程で、彼の他の打楽器作品について知ったが、《I Ching》以外は全くといっていいほど一般には知られておらず、そこに疑問を抱くとともに、《I Ching》以外の打楽器作品はどのような作曲語法が用いられているのか明らかにしたいと思い、本研究を行うに至った。

ノアゴーの打楽器作品に焦点を当てた先行研究は3つある。1つ目はノアゴーの1990年代までの打楽器作品について概説を述べた Ivan Hansen の論文、2つ目は打楽器独奏作品の中でもっとも有名な《I Ching》について述べた Brian Gardiner の論文、3つ目が同じく《I Ching》について述べた Neeraj Mehta の論文である。これらの先行研究から、筆者は問題点が3つあると考えた。まず、質の問題として、1曲に対して細部から全体構造までを詳細に分析したものがないという点である。次に量の問題として、ノアゴーの打楽器独奏作品《I Ching》以外の曲に関しての分析がないという点、そして、ノアゴーの打楽器独奏作品に関する包括的な研究がないという点である。

そこで、本論文では、ノアゴアの打楽器独奏作品を細部から全体構造までを詳細に分析すること、そして、それらの分析結果をもとに、ノアゴアの打楽器独奏作品における作曲語法の特徴及びその変遷を明らかにすることを目的とした。

分析において全体構造まで見る必要性について、これは、演奏家である筆者が楽曲分析を行うことから、演奏のために活かした分析となることを意図したものである。一般的に演奏は一曲を通して行われるものが基本であるため、演奏に活かすための分析としては一曲を通じた分析、すなわち全体構造まで見た分析が必要である。ただし、全体構造だけを見ればよいということではない。一音一音の意味合いを知り、そこから全体構造を理解するために一曲を通じた分析を行うことで演奏に活かすことができると考えられる。ゆえに、本論文においては、細部から全体構造まで分析を行う。

本論文では分析の対象としてノアゴアの打楽器独奏作品 6 曲を取り上げる。その 6 曲とは、ノアゴアの打楽器独奏作品の内、現状手に入れることができない楽譜とトランスクリプションを除いた《Waves》、《I Ching》、《Energy Fields Forever》、《Poeme》、《Nemo Dynamo》、《Arabesques》の 6 曲である。

研究方法としては、要素分析を中心に行う。その後に構造分析を行うことで、一曲を通じた全体構造までを明らかにする。

筆者は本論文の独自性は 3 つあると考える。1 つ目はノアゴアの打楽器独奏作品を対象とした包括的な研究である点、2 つ目は作品ごとに細部から全体構造までの詳細な分析を行っている点、3 つ目は今後ノアゴアの打楽器独奏作品を演奏する際の楽曲理解への大きな指標となる点である。

本論文は 5 つの章で構成されている。

第 1 章ではノアゴアの生い立ちと 5 つの作曲時代区分(ノルディック期、モダニズム期、サイケデリック期、ヒエラルキカル期、ヴェルフリ期)について述べた。ノアゴアの打楽器独奏作品の多くは 1980~89 年(ヴェルフリ期)に作曲されており、この時期はスイスのアウトサイダーアートの画家アドルフ・ヴェルフリの絵画からの影響があるという。ヴェルフリの影響として挙げられる、平穏(idyll)と混沌(catastrophe)の対比や、階層構造についても述べている。

第 2 章では本論文における分析の重要な観点となる、ノアゴア独自の作曲語法であるウェーブ技法と無限音列について述べている。ウェーブ技法については 5 つに分けられる音

の移ろいの技法について、無限音列についてはもとより、無限音列を打楽器作品に用いることに特化させた無限リズムという技法、無限音列を派生形である **Tonefeasts** についてその法則性やフラクタル構造の詳細を示した。

第3章では、先に述べた6曲の打楽器独奏作品の分析を行っている。分析においては、ノアゴー独自の作曲技法であるウェーブ技法や無限リズムの使用の有無や使用箇所、使用方法などを詳細に論じた分析を踏まえ、ヴェルフリ期に作曲された作品についてはヴェルフリの影響による対比関係や、楽曲の全体構造や作曲技法と楽曲名のモチーフの意味や概念などの関連付けについても検討した。

第4章では導き出された分析の結果から考察を行っている。本研究では、ノアゴーの打楽器独奏作品における作曲語法について、独自の作曲技法、構成要素、モチーフと音楽的特徴の関連性、*idyll* (平穏) と *catastrophe* (混沌) の対比など、様々な角度から分析と考察を行った。一次資料である楽譜を主な研究対象とし、要素・構造分析の手法を用いて検討を行った結果、いくつかの重要な特徴が明らかになった。

独自の作曲技法としては、《*I Ching*》や《*Energy Fields Forever*》に見られる無限リズムの階層構造的な使用や、ウェーブ技法との組み合わせによる複雑な語法が特徴的である。《*I Ching*》では無限リズムの原音列の使用やリズムメロディの階層構造としての使用、ウェーブ技法との組み合わせが見られ、《*Energy Fields Forever*》では、複数の原音列を **IOI** (音価) や音域を変えた階層構造としての使用が確認できる。一方で、《*Poeme*》や《*Arabesques*》では半音階の順次進行や複旋律など、伝統的な書法も重視している。

各作品において、曲名やモチーフと音楽的特徴との関連付けが見られた。《*Waves*》では波とウェーブ技法による音の移ろい、《*I Ching*》では『易経』の自然哲学と独自の作曲技法、《*Energy Fields Forever*》ではエネルギー工学と緻密な計算によるリズム書法、《*Poeme*》では詩の散文的イメージと即興的要素、《*Nemo Dynamo*》では楽曲名のモチーフに秘められたパラドクスの概念、《*Arabesques*》では不安定や規則的なリズム構成とアラベスク模様の特徴など、それぞれに特徴的な関連付けが見られる。

特筆すべきは、《*I Ching*》以前の作品では具体的で直接的な関連付けが見られるのに対し、《*Energy Fields Forever*》以降では間接的で抽象的な関連付けへと変化している点である。また、《*Waves*》を除く全作品には、ヴェルフリの影響である *idyll* (平穏) と *catastrophe* (混沌) の対比が見られ、無限リズムとウェーブ技法、弱奏部と強奏部、不安

定なりズムと規則的なリズムなど、何らかの対立構造が特徴として確認できる。

作品の終わり方にも特徴が見られ、全ての打楽器独奏作品が *niente*（消えるように）で終わることは、同時代の作曲家クセナキスが楽曲の終わりを極めて強い強奏で締めくくることと対照的であり、ここにノアゴの打楽器に対する独自のアプローチが窺える。

第5章では本論文全体を通してのまとめを行っている。まず、作曲語法の時代的変遷であるが、サイケデリック期の《Waves》ではウェーブ技法を用いた実験的要素が強く、ヴェルフリ期の《I Ching》《Energy Fields Forever》《Nemo Dynamo》では無限リズムによる複雑なリズム構造が特徴的である。同時期の《Poeme》では順次進行の二重旋律や即興的要素を採用し、2000年以降の《Arabesques》では無限リズムなど複雑な技法を用いずに比較的シンプルな語法を採用するなど、時代によって異なるアプローチが見られる。

また、分析を通して見えたノアゴの独自性は、伝統的技法と最先端の技法を融合させた点にある。打楽器アンサンブル作品では無限リズムのみの曲を書いているが、打楽器独奏作品においては、無限リズムだけでなく伝統的な書法も織り交ぜての使用を選択している。

当時はまだ新しく、作品数も非常に少なかった打楽器独奏作品のジャンルにおいて、6曲という多くの作品を残したことは特筆すべきである。しかし、《I Ching》以外の作品は、マルチパーカッションのセットが大きく、特殊な楽器を多用しているため、演奏機会が限られているという課題も存在する。この点については、数万種類もある打楽器という楽器の特性が、音楽の新しいアイデアを探求するノアゴの姿勢と非常に相性が良かったためと考えられる。

本研究は、比較的研究例の少ない打楽器作品研究の分野において、一人の作曲家の作品を包括的に分析した成果として、今後の研究の一助となることが期待される。伝統と革新を融合させたノアゴの作曲語法は、次世代の打楽器作品への新たな伝統を築いたと評価できる。